
恋鬼

有月 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋鬼

【Nコード】

N0537L

【作者名】

有月 悠

【あらすじ】

「不思議な話を聞いてくれますか？」
時は平安時代、白銀の君と呼ばれる美貌の青年が左大臣家の姫に恋をする……。

平安時代の雅な時代を背景に、千年の時を超える恋物語。

序

不思議な話を聞いてくれますか？

この科学文明の発達した、全ての事象に説明がつくような現代に、私は自らを鬼と言う人に会いました。

とてもとてもきれいな人でした。おそろしげな鬼とは似ても似つかない、まるで夜空に輝く月のような雰囲気、端正に整った美しい顔立ち・・・私は一目で心奪われました。

しかしその後、その人は忽然と私の目の前から消えてしまったのです。何度も何度も謝りながら・・・。

信じられないかもしれないんですが本当なんです。

そして彼の語った物語も到底信じられないものでした・・・。

一、花見の宴

時は平安時代 。

京の都。

今宵この土御門の左大臣邸では夜空を明けに染めよとばかりにかり火をたいて花見の宴が催されていた。

（特に今日は盛大だ）

一人の青年貴族が牛車から降りてきて昼のような明るさを見てそう思った。

すらりとした上背、切れ長の美しい瞳、通った鼻筋、優美な曲線を描く唇、細く整った顎……。月の光にも似た冴え冴えとした美しさに、内裏の女性達はこの青年を白銀しろがねの君と呼んでいた。

本当の名を橘亮澄たちばなひらうそう。

橘の名が示す通り名家の出だがこの藤原全盛の世、身分はまだ低く、参議に上った祖父のおかげでなんとか中務省従六位下、中宮職少進を賜ったところ。他の氏族の同じ貴族からみれば恵まれている方だが、殿上に上がることもまだできない。

だが中宮職という後宮を司る役職をいただいたせいで、後宮の女達に顔が知られ、名前ばかりが世に知れ渡っていた。目にも絢なる美貌の青年がいる……。と噂話を里下がりついでにばらまくからだ。だから亮澄が邸内を歩くと、簾中からどよめきが起こり、一画の御簾がふくらんでその後ろに多くの女達がいることを知らされる。

（珍獣じゃあるまいに……）

亮澄はたくさん視線を受けることに辟易して、扇で口元を隠しながらほうつとため息をつく。

それさえも女達には好評のようできゃーと黄色い声が上がった。

(やつぱり来なければよかった)

とは思いつつ、耳の中にこだまする爺の声を思うと帰るわけには
いかない。

「坊ちやまー!!」

左京三条にある亮澄の邸宅の長い廂をどたと足音を立てて老
人が走つていく。

「な、なんだい？爺・・・」

亮澄は読んでいた漢籍から目を離して顔をひきつらせてなんとか
笑う。

(また、縁談の話かな・・・)

「左大臣家の七の姫の婿選びの宴が催されるそうですぞ!!」

(やつぱり・・・)

亮澄は今年数えて18になるというのに未だ通う姫一人すらいな
いでこの広い邸宅に一人で住んでいる。

父を3つの時に亡くし、母も世を儚んで尼になり、出家してしま
った。

幸いにも祖父が存命で彼にかわいがられて育ったが、その祖父も
亮澄が元服すると、自分の役目もこれまでと思つたのか間もなく死
んでしまった。

幼い亮澄とこの家を盛りたててくれたのがこの口うるさい、いや、
世話焼き、いや、祖父の時代から仕えてくれる忠義者の家司けいし光
雄だった。

だから彼のことはとても口で表せないほど感謝し、信頼している
が・・・。

「左大臣家の姫なんて・・・とても私なんか相手にしてくれない
よ」

やんわりと断った。

「万が一ということもあります！必ず行って下され！」
床に手をつき頭を叩きつけんばかりに下げる。

「そ、そうだね・・・」
と言つて亮澄は再び漢籍に目を戻す。

亮澄は早くに父親を亡くし、母親に去られたせいか厭世的で感情の起伏が乏しく、物事に関心があまり向かなかつた。

女性も同じで幾人も妻が持てるこの時代に未だ一人の妻も持つていない。

「坊ちやま！」

光雄の鋭い声が亮澄の胸を打つ。

「う・・・」

もちろんこの家のためにも自分の出世のためにもいずれは妻を持つつもりだ、いずれは・・・。

「光雄がこの家にお仕えして早30年・・・。父君が亡くなられてから坊ちやまだけがこの家の唯一の希望！お顔も大層良く頭も非常に良く今年になって六位をいただいてからまた男ぶりも増しておられるというのに何故に妻を取られませぬ！坊ちやまほどの男であれば女の一人や二人、いや十人や二十人誘えば簡単についてきましようぞ！」

「そ、そんなことないよ・・・」

「そんな気弱なことではどうされますー！左大臣家の七の姫といえは左大臣が身分低い女に産ませたとはいえ、見れば息も止まると言われるほどの美人！そして左大臣家の婿ともなれば出世は間違いないなし！必ず行って下され！」

というわけで。

爺にああも強く言われては行かないわけにはいかない。

乗り気はしなかつたが、当代随一と言われる土御門の庭をみるのもおもしろいだろう。

たくさんの桜が宵闇の中、薄桃の花を満開に咲かせ、かがり火が

それを幻想的に浮き上がらせていた。

そしてまた野心を持った多くの男たちが、幽玄な桜散る庭に、廂に群れ集っていた。姫の御姿を一目見れないかと、皆鶉の目鷹の目である。

亮澄はその間を縫って邸をうろろろとしていた。

来たはいいが、やはり乗り気がしない。人の少ない方を探して歩いていた。

「あ、あの、し、し、白銀の君様っ！」

ふいに若い女の声がかかった。

振り返ると14、5歳の少女が切羽詰まった緊張した顔をしてこちらを見ている。

宴用に唐衣を美しく纏っているのを見ると、この家の女房だろう。

「確かにそうですが、何か？」

亮澄は怪訝に思いながらも答える。

「あ、あの・・・あの・・・」

少女は顔を赤くしながら何かを言おうと口を開けかけては閉じたりを繰り返す。

「どうぞ、何か用なら言ってください。別に怒ったりしませんよ」

人に言わせると罪作りな笑顔と称される、やんわりとした笑みを向けると少女は少しぼうつとした後、決心をしたようで、

「た、大変不躰とは思いますが、どうか私と一緒に来ていただけないでしょうか！」

「は、はあ・・・？」

突然のことに面食らう。一体どういうことだ？

逡巡していると人の来る気配がした。

少女はおろおろとその気配の方向と自分とを交互に見て、何かを決意した顔をする、

「お、お願いです！ちょっとだけでいいんです！」

少女は青年の袖を掴むと引っぱって歩き出した。

「え、あの・・・」

振り払おうと思えば簡単にできるが、少女に引かれるままその後をついていった。

殿舎の角を曲がり人の気配をやりすごし、そのまま渡殿を渡り、おそらく東の対の屋と思われる普通邸の子女たちが暮らす建物にやってきました。

い、いいのか、こんな所来て・・・。

二、塗籠の姫

少女は妻戸を開け、建物のさらに奥へと引っぱっていく。

やがて塗籠と呼ばれる普段は物置に使われる、広い吹きさらしのよつな寝殿造りの唯一の壁に囲われた部屋の前に来る。

「姫様、姫様、噂の白銀の君を連れてきましたよ！」

少女は嬉色な声を上げてぴたりと閉じられた塗籠の扉へ向かって呼ばれる。

「また嘘ばかりついて！葉月なんてきらい！そうやって私を宴に出そうって言うのね！」

塗籠の中から怒ってはいるものの、鈴のようにかわいらしい声が聞こえてきた。

ま、まさか・・・こ、この声の主は・・・。

「本当です、本物の月の君です。見たくはありませんか？」

葉月と呼ばれた少女はとんと扉を叩き、優しく呼びかける。

・・・どうやら自分は七の姫救出のだしに使われているようだ。

自分の顔の噂は姫の耳にも届いてたんだなーとぼんやりと思う。

そりゃそうか、七の姫の御姉君方はそれぞれ今上と東宮の下に入内なされているものな。

たまにはこの美貌と言われる顔も役に立つようだ。しかしまるで天の岩戸だ。

それにしても姫はこの宴に出たくないらしいな。まだ結婚をしたくないのだろうか？15で結婚を嫌がるなど、子供っぽいところのある姫なのだろうか。

「姫様、本当です、本当なんですよ。一度なりとも見てみたいとおっしゃっていたではないですか、この機会を逃したらもう見れないかもしれないですよ」

葉月が猫なで声で呼びかけるも、塗籠からはうんともすんとも声がしない。

「白銀さま……」

葉月が振り返って亮澄を泣きそうな目で見た。
仕方ないな……。

「姫、自らに仕える者の言葉をあまりお疑いになりませんよう……」

塗籠に向かつて声をかけた。

「嘘……、本当に……？」

驚いた声が扉の内から聞こえてきた。

暫くの沈黙の後、塗の内鍵がかちやりと外れる音がして、扉がそつと開いた。

「姫様っ」

葉月は嬉しそうな声を上げてぱつと扉を全部開いた。

よほど嬉しかったのだろう、後ろに自分がいることなどすっかり忘れたに違いない。

そして露わになった姫君の姿。

……本当に息が止まるかと思った……。

亮澄はあまりの衝撃に持っていた扇を取り落とした。

肌が白く美しいのはもちろんそれを際立たさせる豊かな黒髪。長く長く伸ばしているにもかかわらず先細りなどせず、先の先までつやつやと美しく波打っている。

顔のかわいらしさは比べるものがないほど、天の名工が作ったと思えるほどに美しく整い、うるんだような黒い瞳、影を落とすまつ毛、唇はおもわず吸いつきたくなるような紅さ……。

思わずごくりと喉を鳴らしてしまった。

ふつと姫がこちらを向く。

姫と目が合った。

すると心臓が大きく跳ねてみるみるうちに自分の顔が紅潮しているのが分かる。

姫は「あつ」と小さく声を上げ袖で自分の顔を隠した。深窓の姫君は普通男の前に顔などさらさないものだ。

亮澄は取り落とした扇を拾って紫苑姫に差し出した。

「これを・・・」

「あ、ありがたく頂戴します！」

葉月がぱつと扇を取り、姫に持たせた。

そして姫の前に立ちはだかるようにして、

「白銀さま、このようなことにお使いしてしまい、まことに恐縮で
ございますが、本当に助かりました。これで姫を宴に連れていく
ことができます。どうかお戻りになって宴の続きをお楽しみ下さい
ますよう」

先ほどまでとは打って変わって凜とした口調で亮澄に退出を促す。

「ああ、うん・・・」

しかし生返事で返事したものの動く気にはなれない。

葉月の後ろで打ちふるえている姫から目が離せない。

「白銀の君様・・・」

そうしていると思いがけずも姫から声がかかった。

「は、はいっ！」

「麗しいと評判のお顔を拝見できて、あの・・・嬉しゅうございま
した」

「と、とととんでもございません」

「不躰なお願いを葉月がしたようで・・・」

「い、いいえっ、滅相もございません」

「どうか宴を楽しんでいってくださいまし」

「はいっ」

そう言って葉月に隠されながら姫は部屋の奥へしずしずと移動していった。

三、忘れじの花

亮澄は東の対の屋を出た後もぼんやりとしていた。

目の前にはまだ姫の姿が幻のように浮かんでくる。

魂が抜けたようにふらふらと歩いていると、

「よお、亮澄、こんなところで何やってるんだ？」

目にも鮮やかな濃色の縹の直衣の、亮澄と同じ年頃の青年が声を掛けてきた。

「雅透！」

雅透は以前学館院に通っていた時の友だった。学館院は橘氏の子弟のための学校だ。雅透とは気が合って勉強以外でもよく一緒に遊んだりしていた。

今は式部の丞に任官されている。

「聞いてくれ雅透、さ、さっきな、俺見たんだよあの、姫を・・・」

「は・・・？姫って紫苑姫か？」

「え、紫苑姫？」

「お前知らないのか？本当にこういうことには疎いなあ。紫苑姫ってのは七の姫の愛称さ」

「七の姫の・・・？」

「ああ、紫苑の花言葉知ってるか？」

亮澄は首を横に振る。

「『君を忘れじ』さ。見たら思いを忘れられなくなる、っていうことになんで七の姫をそう呼んでるんだ。お前の白銀の君みたいなもんだ。そっかー、お前見たのか、どうだった？美人だったか？」

「そりゃあ、もう・・・」

本当に忘れられそうにもない・・・。

「どうした？気分でも悪いのか？」

「いや・・・」

「紫苑姫ほどの美人を見て気分悪くなるわけないよなー。もう酒に

酔ったか？」

「あ、ああ・・・」

本当は一滴も飲んでないが。

「そうかそうか、なら飲み直そう！さすが左大臣家、酒も一級品ばかりだ」

雅透は亮澄を連れて宴の席へと入っていった。

亮澄達が宴の席についてしばらくすると、俄かに寢殿の簾中が騒がしくなった。

「お、紫苑姫のお出ましかな？」

庭先にしつらえられた酒の席でもその様子が分かるほどだった。

亮澄はこの時のことを、酒に酔っていたからだと今でも思っている。

万事控えめに生きてきた亮澄の、きつと一生に一度だけ見せた勇氣。

亮澄はさつと立ち上がるとつかつかと歩いて階きわはしを上がり、御簾の中の紫苑姫に向かって語りかけた。

「姫、先ほどお貸した扇を返しては頂けないでしょうか」

「何？少進殿、娘に扇を貸したのか？」

紫苑姫の代わりに左大臣が答える。普通姫君は声など聞かせない。

「はい」

亮澄はそのまま黙る。

御簾の中では左大臣が紫苑姫に何事か問い質すような声が聞こえてくる。

やがて先ほどの葉月という女房が青い顔で扇を持って現れた。

きつと自分がしでかしたことを悔いているのだろう。後で左大臣から咎めがあるかもしれない。本当は自分が黙ってさえいればよかったのだが・・・。

「ありがとう」

詫びのつもりで極上の笑顔でほほ笑む。青い顔がとたんに赤くな

つて葉月はそのまま辞す。

「どうでしょう、無事扇が返ってきたことの礼に、一差し舞わせて
いただきたいのですが」

周りからもどよめきが起こる。

「あ、ああ、かわまない。白銀の君と呼ばれる少進殿が舞われるの
であれば、またとない余興となるだろう」

左大臣は困惑気味に答えながらも許してくれた。

「では」

亮澄は立ち上がって袍の肩袖を脱ぐと扇をぱらりと開く。

君を忘れじ 忘れじの 花あるならば 我が思い とこしえまでも
咲きほこれ・・・

独特の長い節回しでひらりひらりと舞う様は桜の散る如く、美しく
優美な姿は天神の舞かとも思われた。

左大臣は手を打って喜び、

「ほほう、今様とはなんとあでやかな。いや、物静かで有名な少進
殿にこんな特技もあったとは。いや、見事見事」

「ありがとうございます。・・・しかし、慣れないことをしたので
少し疲れました。今日はこれで失礼したいと思います」

「そうか。うん、体をいとうように」

「ははっ」

四、後悔の物忌み

それから三日間、亮澄は出仕もせず、物忌みと称して家で寝ついていた。

自分がしたことを後悔していた。

あんな大胆なことなんてしてしまっただろう……。

でもあの時は体が動いた、としか言いようがない。

よりもよってあんな大勢の前で今様を舞ってしまうなんて……。

思い出すだに身がよじれる。

うまくもない即興の歌に練習もしてない舞とか……。

左大臣様は褒めてくれたけど、きつと自分に恥をかかせないよう、にそう言ってくれたんだろう。あの時の自分の姿はいつたいどうだったんだろう？産まれたばかりの蛾がぎこちなくじたばたと羽を動かしているようなものだったろう。

はあ、と大きいため息をついてまた寝がえりをうつ。

「坊ちやま、お加減はいかがですか？」

「ん……、んん……」

光雄にも生返事しかできない。光雄には何も言っていない。

「雅透様がお見舞いにいらしましたが……」

「そう……」

会いたくはないが……。

「おい、亮澄、何やってんだよ」

繊細な亮澄とは違い豪放な質の雅透は自分の許しなく勝手に邸に入ってきていた。

いつものことだが。

自分も、雅透ほど肝が据わっていたなら、こんなにくよくよ思い悩むこともないだろうに。

「大丈夫かーって、お前どうしたんだその顔！」

「顔？」

顔なんて二三日ろくにのぞいてない。

「光雄……」

「は、はい」

光雄が鏡を取ってきてくれる

「う、わ……」

なんだこれ。しばらくろくに食べてなかったとはいえ、ひどいやつれようだ。それに、なんというか……。

「はー、色っペー……。いったいどうしたんだよ、この変わりようは」

「うん……」

「黙ってちゃ分かんないって。左大臣様も心配してわざわざ俺とこまでお前のご聞きに来たんだぞ」

「は？左大臣様が？なんで？」

「なんでって……。お前この間の宴で左大臣様に気に入られたじやないか」

「気……に入られた？私が……？」

「そうだけー。宴の次の日は得意顔になって内裏に出てくるかと思つてたら物忌みだとかいつて三日もこないし。あ、まさか紫苑姫のところに通つて……」

「ば、馬鹿んなこと……」

「まあ早く元気になって出仕して紫苑姫のところに文を出せよ。美男美女カップルの誕生だつて言われてるぜ」

「……」

「いったい、何がどうなってるんだらう。雅透の話は本当なんだらうか。」

自分が、左大臣様も認める紫苑姫の婿になれる……？

「あの、失礼します、先ほどの話本当なんでしょうか？」

光雄が遠慮がちに雅透に聞いた。

「えー、光雄何も知らないの？教えてやるぜー！こいつな、あの宴

でいきなり今様を歌いながらそれはもう見事な舞を披露して左大臣様を感激させて、今や宮中でも噂の左大臣家の婿がねなんだぜ！」

「ぼ、坊ちやま！ほ、本当なんですか・・・？左大臣様に・・・」

「こつもあからさまに言われちゃうなずくしかない。」

「で、でも歌ったつていつても下手くそな即興だし、舞だつて・・・」

「

「お前なー、自分の顔をよーくみておけよ。お前ほどの美男なら、ちよつとぐらい下手くそだつてよく見えるもんなんだつて。そうじやなくてもお前の舞も歌もよかつたよ」

「ほ、本当か！？」

「本当だつて。明日ちゃんと出仕するんだぞ。そうしたら分かるから」

「う、うん・・・」

「じゃ、今日はたくさん食べてよく寝とけ。うちの莊園の芋とか後で持ってきてやるよ」

「あ、ありがとう」

「じゃな」

雅透は亮澄の肩をぽんぽんと叩いて出て行つた。

「ぼ、坊ちやま・・・」

ぎくつとして振り向くと目に涙を浮かべた光雄が肩を震わせていた。

「坊ちやまが、左大臣家の婿に・・・。な、何故爺に何も言つてくれなかつたんですか・・・」

「いや、こんなことになつてゐるなんて思わなくて・・・」

「爺は、爺は嬉しいですぞー！父君がお亡くなりになつてから苦節十数年・・・」

「わ、分かつた、分かつたからそれはもういいよ・・・」

「とりあえず雅透様も仰られていたようにたくさん食べていただくなければ！勢いがなくなつたとはいえ平城の御代から続く由緒ある橋氏の男がこつも痩せてゐるなどっ。左大臣家に笑われてしまつっ」

光雄は立ちあがると台盤所へ向かって走っていった。

五十過ぎとはとても思えない元気さだなあ・・・。

その後光雄は本当に山ほごのご飯を用意してくれた。雅透の所から早速芋も届けられたようで甘蔓煮の芋がこれまた山ほご膳に出た。

五、幸運の階

ろくに食べてなかったのに急にたくさん食べて少々胃もたれ気味だが、払曉に起き出していつものように大内裏へと向かった。

仕事、たまってるだろうなー……。

案の定書類や巻物や手紙が自分の机に山になっていた。はは……。

「おはよう。随分長い物忌みだったね」

上司の中宮職大夫が嫌味たつぷりに話しかけてきた。

「はあ……」

「それにしても、なかなかやるな。今様を歌ったんだって？」

「は、はあ……」

「いやー、うらやましいもんだ。私も若ければやってみたいもんだ、はっはっは」

「はあ……」

それから入れ替わり立ち替わりいろんな人が自分を見に来た。

さすが貴族社会、こういう出世話には皆敏い。

おかげでちつとも仕事がかどらない。

そうは思うが自分だつて宴の席で楽もないのに今様なんて戯れ歌を歌いながら一差し舞つて、左大臣や姫の気を引いたなんていう素っ頓狂な奴がいたらどんな顔が見てみたい。

自分なんだが……。

やっぱりやめときゃよかつたんだ。なんであんなことしたんだろ
う……。

涙目になりながら全然減らない仕事の山に本当に泣きたくなった。

「やあ、邪魔するよ」

「こ、これは左大臣様っ！」

今度はとうとう左大臣様が来た。

今日の仕事はもう諦めよう……。

「少進殿はいるか？少進殿」

「は、はいここに……」

左大臣様はにこにここと笑いながら一目散に亮澄の元へ来た。

「少進殿、おや、少し痩せたかな？顔色もよくない」

「は、はい、少し気分を害しておりまして……」

「それはいけない。今度顔見知りのよい僧都を紹介しよう。加持祈祷をしてもらおうといい」

「そ、そんな私などにもつたいです……」

「なんのなんの。あの舞が見れなくなったらそれこそもつたいない。主上おかみにこの間の宴の話をしたらとても興味を示されて、見てみたいとまでおっしゃられたのだ」

「主上が！？」

自分の下手くそな舞を主上が見たいって……？

「もちろん、我が娘も楽しみにしておるぞ。宴の際にはまたぜひ来ていただきたい」

「は、はあ……」

左大臣様は亮澄の細っこい肩をばんばんと叩くと、恰幅のいい体を揺らしながら帰っていった。

……本当に、自分は左大臣に気に入られて、紫苑姫の婿がねになつたんだ。

おまけに主上の耳にまで届いてしまった。

「少進殿、仕事大変そうだね、手伝おう」

「え？」

いつもさぼってばかりの同じ位の権少進しんのしょうしんが妙なことを言う。

「少進殿、左大臣様がおっしゃられていたように顔色が悪い。辛かったら帰ってもいいぞ」

「え？」

大夫まで……。

これが貴族社会だ……。今まで鼻にもかかけられない存在だった

が、左大臣、そして主上にまで気に入られたとなれば皆目の色が変わる。

お言葉に甘えて帰ることにした。胃もたれもつらいし。

それから話はとんとん拍子に進んだ。

まず主上にお目にかかるために五位以上の位か特別に昇殿を許される官職が必要だった。

そのために秋の除目を待たずに非蔵人ひくらんという官職をいただいた。蔵人は定員いっぱいなので。

非、とはいっても立派に蔵人でもちろん昇殿が許される。

蔵人といえばエリートコースの登竜門。ここから参議、果ては大
臣まで登りつめることも可能だ。

自分でも信じられない思いでいっばいだった。

今まで禁裏をただ外から眺めるだけだったのに、今やそこに立ち、
仕事は前よりもずっと簡単な仕事ですんだ。

主上には舞を捧げ、お褒めの言葉もいただいた。

今では蔵人の中でも一番のお気に入りだ。側近く召されることも
多く、宴には必ずと言っていいほど列席させられる。

自分のことを苦々しく思う輩もたくさんいたが、バックには左大
臣がついているのでおいそれと露骨なこともされない。

そして紫苑姫とは……。

六、五月雨の逢瀬

外はうつうつとした雨だった。梅雨に入ったようで毎日どんよりと曇り、三日に一度は雨が降る。

そんな中紫苑姫と対面した。

外がうつうつとしていれば心もうつうつとするもので、緊張もあってさつきから一言もしゃべれないでいた。

きつと、きつとあきれてる……。もうやだ、やっぱり帰りたい……。

非蔵人となり主上の覚えもめでたくなっても自分は相変わらずだった。

左大臣様の計らいでここ土御門邸に来たものの、煌びやかな邸の造りと見事な調度品に肝を抜かれ、御簾の奥の恋焦がれて三日も寝込んだ姫を目の前にして魂だけでも抜けだしてしまえればと思った。自分などにはやはり似合わないのではないか……。そんな思いだけがぐるぐると頭を回っていた。

しばらく押し黙っていると、側で控えていた女房が、

「このように長雨が続きますと心塞ぐものでございます。姫におかれましても、何やら心華やぐような話でもあればとお思いでしょう」と気を利かせたつもりなのか言った。

それができれば苦勞しない。自分は主上おかみから「本当にあまりしやべらないね、物静かな人だ」とお言葉があつたほど口下手なんだよ！

「え……。その……」

何か、何か言わないと……。焦るほどに頭の中は真っ白になつていく。

「近江、退つて。二人でお話したいわ」

御簾の中から紫苑姫が言った。

「……」

「姫様……？」

「いいから。亮澄様は人の多いのは苦手なんだわ」

「はぁ……」

近江と呼ばれた女房は退がっていった。

自分より年下でしかもこれから自分の妻となる人に気を遣わせてしまった……。

何でこんなに駄目人間なんだ……。

「姫、お気遣いしません……」

人が苦手なのはその通りなので礼を言う。

「いえ、白銀様……あ、すみません、いつもこう呼んでるので」

「いえ、かまいません。好きに呼んで下さい……あ、私も……」

「はい？」

「あ、あの、紫苑姫、と呼んで構わないでしょうか……」

「はい！あの歌の花の名ですね！」

「そ、そうです」

「素敵！そんな風に呼んで下さっていたなんて」

「いえ、姫の美しさに皆がそう呼んでいるのです。私が言いだした

わけでは……」

「でもそのことであの歌をお作りになったんでしょう？『君をわす

れじ わすれじの……』」

「や、止めて下さい……。その場で作った戯れ歌ですから……」

「戯れ歌などと謙遜しないで下さい。とても素敵ですのに……」

あの歌はずっと私を想ってくれるという歌でしょう？」

亮澄はかーっと顔が熱くなった。確かにそうだけど、さすがに姫の口から言われるのは……。

「私とても嬉しゅうございましたのに。なぜそんなに嫌そうな顔をなさるんです？」

「え、いや、嫌なわけでは……決して。ただ、あまりの幸運に身がすくんでいるのです」

しまった、正直に言いすぎた……。まあ、いいや……。

姫はほうと息をついて、

「本当、とても素晴らしい方なのだからそんなに恐縮することもないのに。もっと自信をお持ちになって」

「は、はあ……」

う……、爺にさんざん言われていることを姫にまで……。

「……昔からこうなのです、私は……。何かにつけて自信がない。そうしてこんな自分のことなど、姫はお嫌いになりはしないかと、不安なのです……」

人も少なで姫の優しさについて本音を言ってしまった。

「まあ！そんなことはありません！好きになりこそすれ、嫌いになどと……」

「！……」

「あ、わ、私つたら……。で、でも本当ですよ。初めてお顔を拝見した時、こんな美しい方の北の方になれたらどんなに幸せだろうと思いましたが」

「ほ、本当ですか……。私ときでいいんですか？」

「ごときなど……。白銀様は本当に素晴らしい方です。だからどうかそんなに畏まらないで下さい。あまり固くなられると、私の方こそ嫌われているのではと思ってしまいます」

「そ、そそそんなことはありません！決して！」

「よかったです。ではもうここを自分の家とお思いなつて寛いで下さいな」

その言葉に亮澄は少し間をおいて、

「自分の家……。か。それならもっと私は静かになつてしまつ……。」

と自虐的になつて言う。

「え……。？」

「いや、これは……。ああ、その、私の邸には私しかいないのですよ」

「……。？」

「だから、寛いだところで話す相手もないので、自然黙っていることが多いのです」

「ご両親は・・・？」

「・・・。父は三歳のころに亡くなりました。母も父の菩提を弔いたいと家を出て寺に籠って暮らしておいでです」

「ご兄弟は・・・」

「親が早く亡くなったので、私一人です」

「白銀様・・・」

御簾から泣きそうな声が聞こえてきた。

「姫！そんなお泣きならしないで下さい。た、確かに親兄弟はいませんが、祖父は私の元服まで生きてかわいがってくださいましたし、家には信頼できる家司がいて親代わりにここまで私を育ててくれたのです。あなたが思うほど、私はっ・・・」

「とてもお寂しかったんですね・・・」

「そんな、私は寂しくなど・・・」

が、言うそばから涙が一筋頬を伝って落ちた。

「いや、これは・・・」

慌てて拭うが後からあふれて落ちてくる。

「あれ・・・？参ったな・・・。なんで、こんな・・・」

「・・・ずっと、そうやってご自分をごまかして生きてきたのでし
ようつっ」

「え・・・いや・・・」

「寂しい、と言う相手もいなかったのでしょう・・・？」
思い当たることがありすぎる・・・。

「そ、それは・・・う・・・ふっ」

とつとつ咽せんでしまった。

すると御簾がはらりと開かれ紫苑姫がこちらへ出てきた。

「・・・っ姫」

相変わらぬの眩しいほどの美しいお姿。

紫苑姫は亮澄の隣に來ると、懐から懐紙を出して亮澄の涙を拭っ

た。

そうして甘えるように亮澄の胸元へ顔を埋めた。

「……っ!!」

亮澄はあまりのことに声も出ない。

「どうかご自分をあまり卑下なさらないで下さい。白銀様はとても強い方」

「強い？わ、私が……？」

「寂しさを殺して生きていくのは誰にもできることではありません。小さい時ならなおのこと」

ずっと胸に秘めてきた事実を姫に暴かれぐさりと胸を突かれる。

それでも強がって、

「そうしなければ生きていけなかった……、ただ、それだけです」
「よ」

と、亮澄は苦い顔で答える。

「それはとてもたいへん立派なことです。寂しさを紛らすために放縦に生きる者の方が数が多いです」

「……」

たった15の、外のことなど何も知らないような姫がなんと大人びたことを言うのか。この姫にも、いろいろな過去があったのだろうか……。

紫苑姫はぎゅっと亮澄の直衣を掴む。

「これからは私がずっと側にいますわ。私の大好きな白銀の君様。

もう寂しい思いなどさせません」

「ひ、姫……」

その言葉に今までのわだかまりが氷解する思いだった。この姫は自分を本当に愛そうとしてくれている……。

紫苑姫はさらに顔を胸にすりつける。

「そもつと心のままに生きて下さい。我慢ばかりしてるから、きつとそんなに頑なになっちゃったのですわ」

「あ、はい……」

返事はしたものの、どうしたらいいか分からない。

「うふふ、おもしろい方」

「え、おもしろい・・・？私が？」

「父様や兄様にこんなことしたらびっくりして甘えるなどお怒りなるだろうし、母様なら優しく頭をなでてくださいます。気の知れた女房ならだきしめてくれますわ。でも亮澄様は何もなさらないもの。おもしろいです」

いや、自分の行動のクエリにそういうのが入っていないんです。

「怒れば、いいんでしょうか・・・？」

左大臣様や兄君がそうなさるなら。

「いいえ。白銀様の心のままに」

「う・・・」

自分は何をしたい？この状況で・・・。

ふっと思ひ浮かんだことはあるが、そ、それはできない！まだ・・・。

とりあえずいつもの自分の解決手段に出ることにした。

「ひ、姫っ、急用を思い出しました！き、今日はお暇したいと思ひます！」

姫に触れないようにその身を離し、立ちあがってその場を脱兎のごとく逃げ出した。

逃げ出した部屋からは紫苑姫のくすくすと笑う声が聞こえた。

ああ、本当に本当に情けない・・・。

(でも・・・)

まだこの身に残る姫の温かさと柔らかさ。

左大臣家の姫として何不自由なく愛情いっぱい育てられてきた姫。

自分とは全く違う幸せな生き方をしてきた姫。

コンプレックスの塊で散々不様な姿を見せたというのに嫌な顔一つせず大好きだと言ってくれた。

それに正反対だと思っていた姫から紡がれた亮澄の心を見とおす

ような言葉の数々。

(そんなに違うことなどないのかもしれない・・・)

次に会う時はきっともっと打ち解けよう、そう思った。

七、鳴神の夜

そうして紫苑姫との仲も少しずつ進展していた。

だいたい亮澄がいたずら好きの姫にからかわれて逃げ帰るのが定石というような仲ではあったが……。

結婚の証である露顕ルケンも間近と思われた。

ただ、貴族の結婚のしきたりとして吉日に三日間続けて通わなければならぬ、というものがある。三日続けて通った後に三日夜の餅を食べ合いながらようやく露顕となる。

だが中々三日間連続の吉日はそうなく、例えあっても今上の覚えめめでたい亮澄は宮中で宴があれば出席しなければならず、姫のもとになかなか通えないでいた。

それでも姫との結婚はほぼ決まったも同然で、焦ることなど何もなかった。

梅雨が明けても夏の太陽が照りつける季節がきても、ままごとのような時を過ごし、良い日が来るのをのんびりと待っていた。

その日は夜半から怒れる鳴神がお出ましになっていた。

生温かい風が強く吹いたかと思うと空に閃光が走り、遅れて低い唸り声がどろどろと響く。

もつすぐ夏が終わり、秋が来る季節なのだ。

亮澄は床に就いていたが目を覚まして雷鳴を聞いていた。

(姫は怖がってなどいないだろうか……)

左京三条の邸で相も変わらず一人寝を続けている亮澄。

早く姫の元へ三日通って露顕ルケンをして昼も夜も堂々と左大臣の家にいたい、非蔵人となって早や三月、だんだん重要な職を任されるようになり忙しさも増してきた。

紫苑姫を放っておいているわけではないが、仕事が楽しく充実しているのでつい忘れがちになってしまう。

今でもまだ左大臣家に行くのは気が引けるし……。
と、激しい閃光とともに、ガンツ、バリバリバリツとものすごい音がした。

近くに落ちたらしい。

(くわばらくわばら)

亮澄は雷避けのまじないを唱えて再び眠りに就いた。

「か、火事ですぞー!!」

どたどたとたと廂を鳴神さながらに足音を立てて光雄が駆けてきた。

亮澄はがばつとはね起きる。

だがきな臭くもないしどこからも炎の明かりが見えない。

「光雄、どこが火事なんだよ!」

眠りをさまたげられて不機嫌に言う。

「ち、違います、我が家ではなく……土御門邸が……」

「おいたわしや……」

「あつという間のこと……」

「なんとむごい……」

目の前に遺体を見せられてもまだ信じられなかった。

落雷による発火だった。折からの強い風にあおられ土御門邸は全焼、他にも多くの命が失われたが左大臣家の者で火事に巻き込まれたのは紫苑姫だけだった。

紫苑姫の遺体は近くの寺に移され、朝の静謐な光の中でも目覚めることはない。

「火ではなく、煙にやられたのでしょう。お顔はとてもきれいなままで……」

この寺の僧侶が訳知り顔に言う。

確かに火事に見舞われたというのに火傷はほぼなく、こうして横

のですわ)

(我慢を・・・)

するのを、やめよう・・・。

「何で・・・、何で死んだんだ何で死んだんだ何で死んだんだ！うわーーーーー！！！！」

姫の遺骸にすがりつき張り裂けんばかりの声で叫んだ。

(どうして、どうしてこんなことになったんだ)

これから、二人幸せになるはずだった。

春も夏も秋も冬もずっとずっと二人一緒に生きていくはずだった。

(これからは私がつくと側にいますわ。私の大好きな白銀の君様。もう寂しい思いなどさせません)

そう、言ったじゃないか・・・。

「ずっと側にいるって言ったじゃないか！言ったじゃないかー！！！！」

そうして小半刻こはんとく(30分)も泣いていただろうか。

(秋になったら、紫苑を見に行きましょう)

ふっと、姫との会話を思い出した。

そうだ、そんな約束をした。山間やままには紫苑の群生地があり、薄紫の花を一斉に咲かすんだとか。

普段外出しない姫のためにも見に行きましょう、と・・・。

(そうだ、紫苑を見に行こう・・・)

亮澄はお堂を出てふらふらと外にさまよい出た。

八、不死の鬼

それからどうしたのかよく覚えていない。

気付いたら山の中にいた。

辺りはもう暗く、ほうほうと梟が鳴き、冷たい風が吹きわたって木々をざわざわと揺らしていた。

(秋になったら、紫苑を見に行きましょう)

そうだ、それで……。

紫苑を見ようと、無闇に歩いて……。

もうここがどこだか分からない。帰るにも帰れない。

(だが帰ったところで……)

紫苑姫はいない。

秋になって除目があつて、左大臣家の姫を手に入れるのに何のてらいもない五位の位をいただいて、晴れて婚儀を営んで、いつか自分の邸に北の方として迎えて子供を欲しいだけ作って……。

そんな風に思い描いていた全ての夢想が露よりも儚く消えてしまった。

(どうして……?)

小さな頃に父母を失い、それでも強く強く自分を律して寂しさ押し隠してここまでなんとか生きてきた。そうして紫苑姫という望外の喜びを手に入れてこれからつつましく幸せに暮らせると思っていた。

だが運命は亮澄に容赦がなかった。幸福の寸前でまた谷底へと突き落とされてしまった。

(どうしてこんな目に……?)

問うても問うても答えなどあるわけもない。誰しもが一度はそう問うが答えは自分で見つけるしかないもの。誰も答えてはくれないのだから。

それでも問わずにいられない。

(何故・・・?)

あと一歩だった。だが踏み出さなくても、時がくれば花は開くと思っただ時を待っていた。それだけなのに……。

(何故にこんなにも苦しまなければいけない・・・?)

生きて生きて生きて何になるう。

紫苑姫はいない、もういない。代わりなどでは意味がない、彼女でなければ……。

叶わぬものなら始めから夢など見せてくれなければいいものを。

ふらふらとあてもなく歩いていると打ち捨てられた小さな社やしろがうっそうと繁る木々の中に、誰にも省みられていないのだろう、朽ちかけて打ち捨てられていた。

どこの、なんの神だか分からない。

でも……。

(神様……)

亮澄はふらりとその社に近づいていった。

(もしも、もしも神がいるのなら……)

どうか、もう一度、どうかもう一度だけでも紫苑姫に会わせて下さい……。

亮澄はそれから七日七晩祈り続けた。

食事もとらず眠りもせず、ただひたすらに祈り続けた。

七日のうちに絢なる錦の衣もすっかり汚れ、髪は振り乱れ髭も伸び放題。

月にも例えられた美しい容貌も頬がげっそり落ち見る影もない。

もう直に命も果てようかに思えた……。

(そんなにも、女に会いたいか?)

男とも女ともつかない不思議な声が失いかけの意識の中、頭の中に響いた。

(会いたい・・・)

すでにしゃべる力も失せている。頭の中に答えた。

(鬼となってもいいか?)

(いい)

(・・・。会えるというても、生まれ変わりの姿ぞ)

(それでもいい。会いたい、姫に、姫に・・・)

枯れ果てたかと思われた涙が絞り出されるように目の端に浮かんでくる。

(会えたところで決して結ばれぬ。それでもいいか?)

(いい)

(・・・これを飲みなさい)

瞼の裏に鉢に満たされた液体の情景が浮かぶ。

亮澄は渴きもあつて夢の中でそれを掴み飲んだ。

するとふつと体が軽くなり疲れもなにもかも吹き飛んだ。

「これは・・・」

体には生気がみなぎりみるうちに体が回復するのが分かった。

目を開けると星空が見えた。

やがて起き上がれると思つて起き上がった。

(ゆめ・・・)

また頭の中に声が響いた。

(ゆめ忘れるなかれ。一つ、自分が鬼だと覺られないこと)

「は、はいっ!」

(二つ、決して女の名を呼ぶなかれ。呼んだが最後、霧となつてき

えましようぞ・・・)

「はいっ」

それ以降その不思議な声は一切聞こえなくなった。

亮澄はしばらく呆けていたが、はっと我に返つてとりあえず帰ろうと思つた。

足を踏み出そうとすると、

(行クナ)

「わっ」

また声が頭に響いた。さっきの声ではない、もっと無機質な感じの冷たい声だ。

「だ、誰だっ!？」

(我八神ノ御使イナリ)

はっと気配がして振り向くとなんと真っ白い毛の狐がこちらをじつと見ていた。その瞳は赤く輝きただの狐ではないことが分かる。

「神の御使い……?」

(左様。汝、不死ノ靈薬ヲ飲ミテ人ナラザリシ鬼トナリツ)

「不死……?鬼……?」

(左様。汝、最早死ヌコト能ハズ、年モトラザリシ。人ソレヲ怪シミテイツカ汝ヲ打ツベシ)

「でも……」

(行クナ)

「あっ……」

狐の姿はふつとかき消えた。

(不死……。死ぬことができない、年もとらない……?)

鬼だ、と言ったな。

自分の額に触れてみる。鬼ならば角でも生えたのではないだろうかと思つて。

しかし何ともなく、ぺたぺたと顔をなでまわし、他にあちこち体を見たが特に変化はない。

いや、変化はあつた。

七日夜も飲食せずにしてやせ細った体が元に戻っており、垢じみていた肌も髪も湯殿で洗ったようにきれいになっていた。

ここに来るまでに沓なんていうあまり長時間歩くのに適さない、木をくりぬいて作ったものを履いて歩いてきて足を痛めていたが、その傷もすっかり癒えていた。

尋常ではない……。

もう人の世に戻ることはできない・・・。
ぺたりと座り込んで都のことを思い浮かべた。

光雄はどうしているだろう、いなくなった自分を心配しているだろう。主上も、左大臣様も、内裏の仲間たちも・・・。

そう思ったらふつと瞼の裏に光雄の姿が思い浮かんだ。

「光雄っ」

『坊ちやま、どこへ行ってしまわれたのですか？坊ちやま・・・』
夜の闇の中、邸の床に伏してでさめざめと泣いていた。

「爺・・・」

これは夢か幻か・・・。

いや、それにしてもはつきりしすぎている。

主上はどうしているだろう・・・？

そう思うと禁裏でお寝みになっている主上の御姿が見えた。

「これは・・・っ」

他にも知りたいと思った人の様子をみる事ができた。

どうやら鬼となって鬼の力も手に入れたらしい。

いろいろ試した結果、他にも行きたいと思った場所に瞬く間に移動していたり、鳥や獣と話ができたり、真っ暗でも物の形が分かったり・・・など。

腹も減らなかつたし渴くこともなくなつた。食べようとを思つたら食べることはできるが肉などは受け付けなくなつていた。

眠ろうと思つたら何時間でも何日でも寝続けることができだし、寝ないでおこうと思つたら同じように何時間でも何日でも起き続けることができた。

人の生き死にも分かる。人の姿を見ていつ頃死ぬだろうとか、赤ん坊ができるかとか。

（これなら姫が生まれ変わつてこの世に来たなら分かるだろう）
きつと分かる。

亮澄は山の洞窟の奥深くに身を隠し、紫苑姫が産まれるまで眠ることにした。

九、平家の姫

(生まれた)

感覚で分かった。

紫苑姫の魂がこの世に再び生を受けたのが。

暗い洞窟の中で何十年ぶりに目を開ける。

ふつと息を吹いて鬼火を作る。音もなく虚空から現出した炎は亮澄の姿を照らす。

体はもちろん元のままだったが着物が茶色く古びてぼろ布になっ
てしまっていた。

これでは外に出られない。

遠見をするとこの洞窟の入り口付近を盗賊がねぐらにしているよ
うだった。

外は夜、皆寝こけていた。

(ちょうどいい)

鬼火をそのまま伴い足音を立てないように近づく。

風を操り冷たい風を洞窟の奥から吹かせる。

その気配に一人の者が目を覚ます。

「んー、寒い・・・いいっ!?!」

鬼火と、それにぼんやりと浮かび上がっているであろう自分の姿。

「で、で、で、出たー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

その声に他の者も全て起き出す。

「ぎゃー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

「ひー!ー!ー!ー!ー!ー!」

「お助け!ー!ー!ー!ー!ー!」

てんでに叫び声を上げて洞窟から逃げ出していく。

「お、おお己源氏の亡者か、たまた退治してくれる!」

その中に一人骨のある奴がいた。剣をこちらに向けているが切っ
先は震え定まらない。

「っが！」

金縛りにかけて近づくと。

「あわわわわわ……」

失禁したのか小便の臭いが漂う。そのまま失神してしまった。

(着物をもらおうと思ったのに……)

仕方がないので男の額に手を当て記憶だけをいただくことにした。

(今は応保元年(1161年)……。この者は平家のはぐれ者か。

……なんとあの平家が宮廷を牛耳っているだど!? 信じられん……)

時の移り変わりとはすさまじいものだ……。

武家など歩く犬にすぎなかったものを。

男の記憶では大した情報は得られない。

亮澄は盗賊の棲みかをあさり、着物と銭や金目のものをいただく洞窟を出た。

それから時々都や町に出入りしては世情を入手しながら、紫苑姫の長ずるのを待った。

会ったところで赤子ではやりきれない。さらっても亮澄には育てられない。何より生まれた父母から引き離すのは亮澄には絶対にできない。

紫苑姫に会ったのは彼女が15の年。一応それまで待とうと思っ

た。

(だがどうやって姫に近づいたものか……)

<ゆめ忘れるなかれ、鬼と覚られてはならぬ……>

この制約があるので鬼の力はあまり使えない。

あくまでふつうの一般男子として近づかねばならない。

紫苑姫はこの時代にあつても貴族の姫として生まれ変わっていた。

平清盛の八女、母は常盤御前。またも権力者と身分低い女との間

に出来た子だ。

紫苑姫は清盛の元に引き取られ大切に育てられていた。

(手の出しようがないな)

まあ、何とかなるだろう、時間はまだある・・・。

十、六波羅の忘れ草

「ここは、どこですか・・・？」

亮澄は貴族用の衣服を手に入れ、わざとその着物を引き裂いてボロくして、石で頭を打ち出血させ、六波羅にある平家の門前をふらついてみせた。

ここ六波羅は平氏一族の拠点。その広さは二十町余り。その広大な区画に塀を巡らせ、その中に三千三百余りの邸宅が立ち並んでいる。

その中の清盛の居館は泉殿と呼ばれる。紫苑姫はそこで暮らしている。

「なんだなんだ、何事だ」

すぐに数名の侍たちが亮澄を取り囲んだ。

「ここはどこですか？私は、私は・・・誰だ・・・？」

亮澄は頭を抱え込み、苦しんでいる演技をする。

「何だお前、記憶を失ってるのか？」

「町人ではないな、この服装。どこかの公家のお坊ちゃんが夜遊びの帰りにすっ転んで記憶を失くしたのかもしれない。役所に調べてもらおう」

「とりあえず中に入れ」

亮澄は内心ほっとした。うまくいかなければ魅了させて言うことを聞かせようかと思っただが、そんなことをしなくても騙されてくれた。

まあ、元々貴族のお坊ちゃんなんだし・・・。

「それで、何も覚えてないと」

髭面の侍が床几に座り、簡素な土間の一室に座り込んだ亮澄の顔を覗き込んで尋ねる。

「はあ・・・」

亮澄はさも困ったように目線を落としてため息まじりに答える。

「しかし役所に問い合わせてもそんな者はいないとの答え」

「はあ・・・」

「しかし身なりから察するに高貴な身分の方と思われる。一体どうしたものか・・・」

「うん」

周りの5、6人いる侍たちも一様に首を傾げた。その様子がおかしくて吹き出しそうになったがなんとかこらえる。

「都の人ではなく、地方から帰ってきた貴人では？」

「打ち捨てられた宮人が都恋しさに帰って来たのでは？」

「宮人!？」

「なんだかすごいことになってるな」。宮人つて天皇の血筋の人だぞ。

そんなこんなで結局平家預かりの身となった。

とある人の屋敷に世話になり、「萱人かやと」という名前をもらった。

萱草かやくさ、別名忘れ草と呼ばれる植物が由来だ。全て忘れてしまった人、と言う意味でつけられた。

紫苑とは何と対象的な名前だろう。付けた人は知ってか知らずか・・・。

亮澄は萱人と呼ばれ、読み書きできるのでその家の家政的なことを手伝って日を暮した。

やがて機会は訪れた。

屋敷の使いで泉殿に行くことになった。

遠見をして姫の住んでいる建物や場所は分かってる。

うまく時を合わせれば例え御簾越しだろうと姿を見ることは可能だろう。

臉の裏に描かれる姫は美しさをさらに増したようにみえる。

顔はやはり別人。だけど分かる、魂は確かに紫苑姫だ。

一目、一目会えればそれでいい。そう思っただけで生きてきた。姫に会える、そう思うと嬉しさで体が震える。

心臓が高鳴り、激しく脈打つ。呼吸さえも苦しくてめまいを起しそうだ。
だがこんなところで倒れるわけにはいかない。自分で自分を奮い立たせて歩く。

泉殿に着き、用が終わると人の目を盗んで庭へ出る。

怪しまれたら迷ったとでも廁を探しているだのなんだの言えばいい。

はやる心を押さえて姫の住む建物を目指した。

大丈夫、ちょうど姫はどこかへ行くところだ。

そう、道に迷ったふりをして、さりげなく、さりげなく……。

やがて廂を渡る数人の女の列が見えた。

亮澄はさも偶然行き当たったという感じを装って地面に平伏した。

「誰ぞっ」

鋭い誰何の声が飛んできた。

「申し訳ありません！私平××様の下にて家令をしております萱人と申す者であります。道を間違えこのような所に出てしまいました。平にご容赦を！」

「萱人……、ああ、大層顔のいいという記憶喪失の居候ね。どれ、顔を上げてごらん」

物好きのしそうな声で女が言った。

（やった……）

亮澄はどきどきしながら顔を上げる。顔が良くて本当にこの時ばかりはよかった。

廂の渡りには誰何すいかしたのであろう中年の女性と、その後ろに……。

紫苑姫……。

懐かしさと嬉しさで泣いてしまっそうだ。

まだあどけない幼い顔。不思議そうに亮澄をきよんとした顔で見ている。

覚えてなどいない、だろっな……。

当たり前だ。

忘れられていることなど、そんなこと百も承知だったはずだ。
それでもやはり自分を見てほんやりとされているのを見ると憎ら
しい。

「もうよい、お退がり」

「はい」

一度平伏してから顔を上げないようにそそくさと退散する。

だが一度だけ目を上げた。

するとなんと姫がこちらを見ていて目が合った。

やはり不思議そうな顔で亮澄をじっと見る。

まさか覚えてるわけ、ないよな……。

……でもそれだけでも報われた気がした。

紫苑姫はお付きの者に促され、亮澄から目を離すと歩き出した。

十一、恋の鬼

そうして亮澄は日毎夜毎焦がれる想いを抱えて実らぬと知っていても分かつていても姫を想い続けた。

屋敷の主人に泉殿に用はないかと日に何度も尋ねては怒られた。

やがて姫が病気になったという噂が聞こえてきた。

急に食事を摂らなくなり、床に寝ついてしまったという。

原因は自分だった……。

知らず知らずのうちに魂を飛ばしていたようで、紫苑姫の周りに自分の生き霊が姿を現し姫を苦しめているという。

まさか自分の鬼の力が姫を苦しませることになるとは……。

だが姫を想うことを止められようはずもない。

京を離れようか……。しかし生き霊が距離を隔てたところで収まるだろうか？ましてや自分は鬼である。その恐ろしいほどの力は未だ計り知れない。

そうこうしているとある日泉殿から使いが来た。

「萱人はいるか？」

「はい、おります」

亮澄は出て行って対応する。

「お前か。なるほど、本当にきれいな顔をしているな」

「はあ、どうも」

「噂は聞いているか？」

「……はい」

「悪く思わないよ」

男が片手を上げて合図をすると、6人の甲冑をつけた侍たちがなだれ込んで来た。

「なっ……!？」

あっという間に捕らえられて床に組み伏せられて縄をかけられた。「ひっ立ていっ！」

「待つて下さい！何故にこのようなっ・・・」

「日毎夜毎八の姫様を悩ます悪しき鬼、だからだ」

（ばれたっ・・・）

（一つ、自分が鬼だと覺られないこと）

（霧となつて消えましようぞ・・・）

嫌だ、まだ消えたくないっ・・・。

「ん？」

「うわぁっ！」

「ど、どこに行った!？」

「き、消えたぞ！」

・・・良かったんだろうか？

とつさに隠行で逃げてしまった・・・。

遠見をすると六波羅は蜂の巣をつついたような大騒ぎ。

でもとにかくも自分はまだ消えてない。

しかしもうこれで六波羅には戻れない。紫苑姫である八の姫には

近づけない。

また、待てばいい・・・。

亮澄は光の差さない洞窟に身を隠した。

時々覺醒しては八の姫の様子を遠見した。

それで知つたが、八の姫は自分の生き霊を見て寝ついたのでなく、あの日以来自分に一目惚れして、それで恋煩いで寝ついていたのだという。

それを知った父である清盛は亮澄をさつさと殺すことに決めたらしい。鬼だということにして。

ばれてないなら、逃げることもなかったかもしれない。

(だけど・・・)

八の姫はその後平家とともに壇ノ浦まで行動を共にするが、その後都に帰り、貴族の上臈女房となり、それなりに幸せな人生を歩んでいる。

それに引き換え自分はどうかろう。鬼である身ゆえ人と交わることはできず、暗い洞窟の中に身を潜ませ、絢の錦はすでに色を失い、遠くからただ姫を眺めるばかり。

日の光の中、姫は立派な屋敷に住み、他の女房達と笑い合い、移りゆく身を少し嘆きながらも何不自由することもなく暮らしている。鬼である自分には姫を幸せにすることなんかできない・・・。自分はまだ貴族でもなければ人でもないのだから・・・。

(会ったところで決して・・・)

なるほど、こういう意味か・・・。

所詮自分は人の道を外れた鬼。

浅ましい執着でこの世にさまよう亡霊。

あの時終えなければならなかった生を我欲で捻じ曲げてしまった。罪人は罪人、その咎を負うは定め。

(それでも・・・)

それでも求めてやまない紫苑姫の面影。

どれだけ傷つこうと苦しもうと構わない。

姫に会えるのならば、どのような艱難辛苦も耐えてみせよう。

亮澄は目を閉じた。

次に目を開けた時は海の彼方から来た敵国との騒乱の時。

3度目は天皇家が南北に分かれて戦った動乱の時代。

4度目は日本全体が戦に明け暮れた戦国時代。

5度目は天下が定まった泰平の江戸時代。

6度目は日本が世界を相手に戦い、敗れた有終の時代・・・。

十二、泡沫の夢

「そうして君が七度目なんだ」

そうして笑う目の前の人は本当に綺麗な顔で笑った。

季節は秋、10月の暑くもなく寒くもない静かな秋晴れの下、カフェのテラスでコーヒーを飲む自称「鬼」だというこの人は、確かにこの世の人ではないような美しさだけど、確かに普通の人だった。「でも、何か、覚えがあります……。時々、私の周りうるついでいませんでした？」

「うん、してたよ」

事も無げに答えた。

(ス、ストーカー……?)

「そう、千年ストーカー」

私は飲んでいた紅茶を吹き出した。

「大丈夫? 何せ鬼だから君の心くらい簡単に読めちゃうんだよね」

「嘘、冗談……!?!」

「ああ、もうしないから。落ち着いて」

「……」

「本当だつて。心の中で悪口言っただらん」

(人の心読むなんて最っ低!)

思っただけ、彼の顔は変わらなかった。

「ね、大丈夫だつて。千年も生きてるから心の声を聞くも聞かないも自由自在」

と、手をひらひらさせた。

「そ、それで一体何なんですかつ!? 鬼だとかなんだとか、新手的ナンパですか?!」

すでにナンパされることはこの際おいとこう。だってかっこよかつたんだもん……。声掛けられたらついてっちゃうって。

「もう終わらせようと思っただけ」

その人は淡く薄く笑った。この昼日中の眩しい太陽の下では消え
そうなほど儂い笑顔。

「え・・・？」

「君が本当に好きだった。千年もつきまとうほど」

その人は視線を落とし、シュガースティックの空き袋を物憂げに
指先で器用に弄ぶ。

「はぁ・・・」

言われたってなんだかぴんとこない。だってさつき会ったばかりだし、さつきの話だって信じられないし、それにこんな顔のいい人に言われても口説きの常套句にしか聞こえない。だいたい前世の私を好きだなんてそんなの私じゃないしやっぱりこの人はどうかしてるんじゃないだろうか。

「あの、もう失礼していいですか？用があるので・・・」
「用なんてなかったが、帰りたくなった。」

「・・・紫苑」

その人は視線を落したまま、つぶやくように言う。

「！！！」

その言葉に全身の毛が総毛だった。

な、何これ・・・？

頭の中に見たこともない様々な風景が浮かんでは消えていった。

こ、れは、記憶・・・？私の・・・？

覚えてる、確かに、どれも見たことがある・・・そう感じる・・・

その記憶のどこにも必ず現れる、同じ、美しい顔の、人・・・。
ぱっと顔を上げてその人を見る。

目の前の人はその記憶の中の人と同じ顔をしていた。

「し、ろが、ね・・・」

知っているはずのない名前を口にした瞬間、ぼろりと大粒の涙がこぼれて落ちた。

いつのどの時代でも私はこの美しい人に恋をした。そしていつも

報われることのない恋をしていた。

「私のせいで、あなたはいつも辛い思いをしていた」

私は首を横に振る。伝えたい想いが多すぎて言葉にならない。いく人もの過去の私が錯綜して様々に想いを告げようとする。

「私は愚かだった。死を受け入れられずにあなたを想い続けることがどんなに愚かで浅はかで馬鹿なことか分かっていて。分かっていてもやめることができないほどに」

「そ、そんなこと、な・・・」

「結果、あなたを苦しめることになるだけだった。鬼となる代償の犠牲にあなたを勝手に巻きこんでいた。あなたと私があれば何故か必ず恋に落ちる。報われない恋に・・・。この己の醜い我執に付きあわされるのは、一番傷つけたくないあなただというのに」

「・・・！」

「それでも、私は鬼の身体を捨てることができなかった。死ぬのが嫌だった、あなたに会えなくなるのが嫌だった！」

ふっと、その人の体がうっすらと透けかかった。

「嘘、何それ・・・消えて・・・待って・・・、ねえ、どうして、何で・・・」

「『二つ、決して女の名を呼ぶなかれ。呼んだが最後、霧となってきえましようぞ・・・』」

「それは・・・？」

「鬼となった時の契約の言葉です。先ほどあなたの名前を呼んだので」

「だから消えるっていつの!？」

「はい」

美しい儂い笑顔のままその人は涙をその両の目の端から流した。いよいよその姿は薄く溶けていく。

「だめ、行かないで！私ならいい、報われない恋なんてそこから中転がつてるじゃない！この先いくつ増えたって・・・」

「いいえ。あなたはそんな恋を知らずに幸せになるべきだ。もう散

々苦しんだのだから」

「待つて！待つて！消えちゃだめよ、ねえ、幸せになりたいのはあなたじゃないの！？私と幸せになるのはあなたじゃないの！？」

「どうか許して下さい……。謝っても、足りないかもしれない、けれど、どうか……。私はあなたが好きだった、本当に、本当に、ただ好きだったんだ……。」

「私も、私もよ！だめよ、行かないで、消えないで！」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……。」

……。消えた。

ふつと我に帰ると店にいる多くの人がこつちを見ている。

今の光景を見た人はいるんだろうか。人が消える様を。

だが誰一人話しかけてこない。他人に無関心な都会ではそんなものなのか、それとも私が見た夢だったのか……。

いいえ、夢なんかじゃない。目の前にはあの人が残したコーヒーのカップ。

確かに一緒にここに来て座って、話をしたじゃない……。

私はあの人のカップを手にとって口をつけたと思われる箇所に口をつけた。

震えながらそつとそつと……。

触れた瞬間に涙が落ちる。

たぶん初めてのキス。

なんて、なんて報われない二人なのだろう……。

あんなに好きだったのに、あんなに愛したのに口づけすら交わしたことがない……。

「う……。ふつ……。」

私はうつ伏して泣いた。

胸の奥が痛い、重くて切なくて……。

ああ、白銀様、何故忘れてなどいられたのだろう。

どうして忘れてしまうのだろう、あんなにも好きになった人を。覚えてさえいられるなら、例え地獄の中からだって見つけ出してみせるのに。

ああ、・・・様。

あれ、名前、何だっけ・・・？

もう忘れかけてる！？

嘘、忘れたくなんか無いのに、思い出したのに！！

だが過去の記憶は水が渦を巻いて流れ落ちるように消えていく。

お願い待って、消えないで・・・。

あなたをあなたをあなただけを好きでした。

あなたがあなたがあなたさえ目の前に現れてくれたなら、例えどんな姿でもきつとあなただと分かって見せる。

だからどうか、どうか、もう一度出会いましょう。

必ず必ずあなたをあなたと見分けます。

そして今度は幸せになりましょう。

どのような罪を重ねていたとしても、全部全部許すから。

あなたのこと忘れたりしません、だって私は私は・・・し・・・？

私は・・・、誰・・・、だっけ・・・。

私はその場で気を失った。

終

何かを忘れていている気がする。

そんな気はするけど、何を忘れているのか分からない。

私は少し首を傾げながらも目の前の扉が開くのを待っていた。

教会の鐘が鳴り、二人を祝福する。

扉が開き、赤いじゅうたんの敷かれた道が目の前に現れる。その脇にはたくさんの人々。祝福の声を受ける。

おめでとう、おめでとう、おめでとう……。

鐘の鳴り響く音と人々の歓声を聞きながら、遙かな青い空を見上げる。

紙吹雪の舞う中に、何かを見た気がする。

「どうしたの？」

「ううん、何でもない」

何だろう、胸の奥がほんの少しだけちりちりと痛む。

ねえ、私幸せだよ、私達幸せだよ、私達幸せだよね？

隣に立つ人を見上げて、ふとした疑問を思う。

彼は優しく微笑んだ。

彼とは平凡に出会って、平凡に恋をして、平凡に結婚した。

ねえ、私幸せよ、幸せよ・・・ね？

答えを返してくれるはずのない虚空に向かって問う。

空に答えなどない。

きつと気のせいね。

私は彼と腕を組み、ライスシャワーを浴びながら二人の道を歩き出した。

大丈夫、私は幸せ、幸せ・・・。ねえ・・・。

終（後書き）

ここまでお付き合いいただきありがとうございます。感想、批評お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0537/>

恋鬼

2010年10月8日11時04分発行